佛教大学　文学部論集　第94号（2010年3月）

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

――籠神社を中心に――

黄　　當時

〔抄　録〕

古代日本語の船舶の名称には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。これらの単語には、適切な海の民の視点、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識を持てば正確に理解できるものがある。

茂在寅男氏は、『記紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、ハワイ語を用いて簡潔に説明した。

浙江省の漁民が使う言葉に「無眼龍頭」があり、「無目籠」（『日本書紀』神代下、第十段、正文）は船眼の装飾がないカタマランのことである。「籠」は、船舶名称に用いられる場合、カタマ（タミル語に由来）とコ（ハワイ語に由来）の二読がある。「籠」は、また、竹冠と龍とから構成されているが、船材に竹を使用した龍舟/龍船のことである。コノ（ハワイ語に由来）は、kau-nui（船-大きい）を書き記したもので、海の民の重要な水上交通手段のことである。

キーワード　籠、巨濃、无間勝間之小船、無目籠、大目亀籠

1．はじめに

籠神社は、『日本国語大辞典』（p.973）に次のように説明されている[101)]。

この-じんじゃ【籠神社】京都府宮津市大垣にある神社。旧国幣中社。祭神は彦火明命（ひこほあかりのみこと）、豊受大神（とようけのおおかみ）、天照大神（あまてらすおおみかみ）ほか二柱。養老三年（七一九）本宮を真名井ケ原から現在地に移転。本殿は唯一（ゆいつ）神明造の原型として知られる。また、「籠名神社祝部氏系図」（海部氏系図）は日本最古の系図の一つで国宝。丹後国一の宮。こもりじんじゃ。籠守権現。籠宮大明神。元伊

勢。元伊勢一の宮。

『日本国語大辞典』は、「籠」を「この」と読むことは示しているが、何故、「この」という名前が付いたのか、「この」という名前にはどのような意味があるのか、については説明がない。この神社にこの名前が付けられた頃に用いられていた言語は、恐らく、忘れ(去)られたであろうが、この「この」という名称に失われた言語の痕跡が残されている可能性は、ないのであろうか。古代日本語の船舶の名称には、いわゆる日本語一視点のみでは正確に理解できないものがあるが、「この」が船舶の名称に由来する可能性は、ないのであろうか。

海の経験の乏しい私たちには、この問題について判断する能力や知識が欠けているかも知れないが、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点にもう少しでも近づけることができさえすれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。いわゆる海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになろう。小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の知識を入手しつつ、言語学的視点から「籠」の文字表記を持つ船舶名称とともに籠神社の名称の由来を探っていきたい。

2．先行研究

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、二人の研究者が「枯野」解明の過程で示した知見が有用と思われるので、見ておきたい。

先ず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないか、と推論している[201]。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった[202]。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は[203]、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している[204]。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一

語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌー……をその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の知見は、従来不明であった事柄を言語学的に解明したもので、私たちの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明に極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

3.『万葉集』の船

寺川真知夫氏が『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめているので[301]、井上氏の説くところを手掛かりにして、考察を加えておきたい。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰（四三三六）、伊豆手乃船（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫禰（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三六六（ママ）の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

以下、順を追って検討してみることにしよう。

先ず、（四三三六）の「伊豆手夫祢」[302]と（四四六〇）の「伊豆手乃舟」[303]である。

異文化の語彙（外来語）を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意訳の二つの方法がある。

中国語では、いずれも漢字で表記するが、音訳してみたもののこれではわかりにくいかもしれない、と考えられる場合、さらに類名を加えてよりわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法を採ることが多い。

例えば、beerやcardという単語は、「啤」や「卡」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない（例:扎啤、〔ジョッキに入れた〕生ビール;信用卡、クレジットカード)。ところが、「啤」や「卡」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

「異文化の語彙（外来語）＋類名」という、現代中国語に見られるこのような表記法は、古代日本語にも見られる。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫祢」や「舟」という類名を加えて、「手夫祢」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、いずれも全称が「手乃」と呼ばれた船と考えてよいであろう。表記の違いは、（四四六〇）では、全称の「手乃」をそのまま使うことができたが、（四三三六）では、音節数の制約により一文字少ない略称の「手」を用いた、ということから生じている。もちろん、逆に、（四三三六）で略称の「手」で詠まれた船は（四四六〇）では音節数の制約を受けることなく「手」に「乃」を後置した全称の「手乃」で詠まれている、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、歌人が音節数の制約から用いた略称の「手」は、全称の「手乃」の前置要素「手」が略されて後置要素「乃」が残ったものではなく、後置要素「乃」が略され

て前置要素「手」が残ったものである。意味が取れるかどうかにかかわらず、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造であることは、見て取れる[304]。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996では、「手」の漢字に「て」のルビを振って「手」としているが、「手」は、「手」の正確な意味がわからないまま無難な訓みを取り敢えず一つ当てただけのことではないのだろうか。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により、「た」を書き記すのに用いられたり「て」を書き記すのに用いられたりしていた、と考えてよい。歌人が「た」と詠み「手」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、むしろ高いのではないだろうか。

次は、（三一七二）の「熊野舟」[305]、（〇九四四）の「真熊野之船」[306]、（一〇三三）の「真熊野之小船」[307]である。

（一〇三三）の「真熊野之小船」は、（三一七二）の「熊野舟」や（〇九四四）の「真熊野之船」とともに、ある同じタイプのものを指している、と考えられる。つまり、（一〇三三）の「小船」は、「小」という情報を明示しており、（〇九四四）の「船」と（三一七二）の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、（一〇三三）の「小船」と同じもの、と理解してよい。

最後は、（三三六七）の「安之我良乎夫祢」[308]である。

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙（外来語）＋類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

歌人はある船を「を」と詠み「小/乎」と書き記した、と考えるのみでは、重大な事実誤認をする可能性がある。歌人がある船を「こ」と詠み「小/乎」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、このケースではむしろ高いのではないだろうか。確かに、お遊戯、お散歩、や、おみかん、おりんご、のように、おふね、と言うことは可能ではあるが、歌でも会話と同じような頻度でそう詠むものなのか、使用頻度は男女とも同じなのか、話し手と聞き手の地位や年齢層による言い方や詠み方の違いはないのか、「おふね」以外にはどのようなケースがあるのか、などを考える必要性もあるのではないだろうか。

後人は、海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「小船」や「乎夫祢」の正確な意味がわからず[309]、「小/乎」を接頭語か形容詞と誤解して「を」と訓んだが、熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性があるのではないのだろうか。

この文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」か「こ」を書き記した（「を」か「こ」の音声を示している）ということだけである。「小/乎」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、無邪気に過ぎるが、「小/乎」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語の船舶の名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。研究者は、「こぶね」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅に置くとよい。

漢字は、形音義の三要素からなるが、表意文字と分類されるように、表意力が強いため、漢字を理解できる者が、漢字の字形が示唆する意味にとらわれずに情報を解析することは、一般に、容易ではない。この問題もそうだが、漢字が表音に用いられている（ことを見抜かねばならない）ケースでも、字形が示唆する意味で解け（た気分になれ）れば、思考がそこで停止する。その結果、漢字表記が行われる以前の日本語の実相を見誤ることが間々生じるのである。

このケースでは、歌人は、「小」や「乎」を表音に用いたのであり、表義に用いたのではない、と考えてよい。（三三六七）の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていればよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまっても無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪失してしまうのである。

それでは、「手」、「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する異文化の語彙（外来語）を音訳したものということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、そして、「小/乎」は「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃（tau-nui）」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫1980が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように（p.142）、（四三三六）の「手（tau）」は（四四六〇）の「手乃（tau-nui）」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手（tau）」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎（kau）」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手（tau）」が使われ、熊野や足柄では「小/乎（kau）」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手（tau）」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎（kau）」と呼ぶ人々がいたということを示しているからである。

これで、古代の日本の船舶には、修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの（kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野；kau-nui、狩野[310]；tau-nui、手乃[311]）と、「nui」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの（tau、手；kau、小/乎）があったことがわかる。

4．無目籠

海幸彦・山幸彦の話の中に、山幸彦が釣針をなくして海岸で泣いていた時に、シホツチの老翁が来て、ある船を造り、ワタツミの宮に行かせる場面がある。

ある船とは、「無目籠」（『日本書紀』神代下、第十段、正文）[401]のことであるが、『日本書紀』では、「無目堅間」（神代下、第十段、一書第一）[402]とも表記され、『古事記』（上巻）では、「无間勝間之小船」[403]、「無間勝間之小船」[404]と表記されている。そして、これら四者（以下、姉妹船）以外に、さらに一つ、「大目龜籠」（『日本書紀』神代下、第十段、一書第一）[405]という名称も持っている。

個々の姉妹船は、一見、難解であるが、体系的に見ていくと、それぞれの船名や付随する記述から、それなりに筋が通った情報が読み取れる。考察の便宜上、姉妹船をひとまず「無目籠之小船」の一語に括っておきたい。

書かれた時点では、書かれた内容は理解できたはずであるが、後人は、書かれた内容が理解できないため、「無目籠之小船」の解釈に長く苦しんできた。この言葉は、一般に、次のように説明されている。

> 竹で固く編んだ、すきまのない小舟[406]。
> 隙間のない竹の籠[407]。
> 隙間なく竹を編んだ小さな籠の船[408]。
> 密に編んだ隙間のない籠[409]。

籠は、所詮、籠である。竹籠にどう手を加えたところで、大海へ乗り出すには貧弱すぎる。古代の旅は、身分の高い者にとっても決して楽なものではなかったが、山幸彦は、この船旅でどのような船舶を利用したのであろうか。山幸彦の遠出のためにわざわざ造ったのであれば、籠などではありえない、と見るべきであろう。

茂在氏は、次のように述べる[410]。

> ……無目堅間小舟……は御存知であろう。……在来は目つぶしをした篭の舟と訳しているこの船。無目は水密なと訳しても良いが、その後を私は次のように考える。
>
> カタマランを、元の響きを残して日本語に訳せといったら、「カタマ小舟」と訳すのは無理な話であろうか。私は「堅間小舟」は文字に意味があるのではなくて、発音に対する当て字が使われたのだと解釈する。……もっともカタマランとはタミール語である。カタとは「結ぶ」マランとは「木」で、筏のことも双胴船のこともカタマランと呼んでいたのには数千年の歴史がある。

茂在氏の着想は、鋭い。氏の主張には、耳を傾けるべきところが多々あるが、特に、字面にとらわれない解釈を提案したことは、重要である。氏が、「籠」を、カタマランの音訳である、と看破したことは、画期的であり、その功績は大きい。しかしながら、「無目」を、水密な、

と解釈したことは、従来の解釈の域を出るものではない。水密でない船は、水上の乗り物としては不適当である。『記紀』は、どの船にも求められている必須条件にわざわざ言及しているわけではない。この「無目」は、文字通り、「目がない」という意味なのである。

中国語では、龍の装飾があるものを、龍と言うことがある[411]。龍舟節/龍船節で使用する舟/船には龍の装飾が施され、今日、一般には、龍舟/龍船と言うが、単に龍と言ってもよい。例えば、唐の薛逢の詩「観競渡」に、「鼓聲三下紅旗開，兩龍躍出浮水來」とあるが、この龍は、龍舟/龍船のことである[412]。

苗族の文化では、船は龍に同じ、と考えられている。

このような、船を龍と同一視する考え方は、例えば、浙江省の舟山（杭州湾）地区にも見られる。ここで、この地区の漁船について書かれた文章を一つ見ておきたい[413]。

> 长江口外东海杭州湾一带，是中华古国最早出现海上渔船的海域之一。现今概念上的嵊泗渔场，正是处于这片江海交汇丰饶大海域的最佳区位上。……据考古，上古时期的吴越风俗由海洋传播至嵊泗列岛。由此推断，最早出现在杭州湾外长江入海口之嵊泗海域上的，当是独木渔舟。……在相当长一个时期内，这种独木舟式的渔船之船头两侧没有船眼装饰，因此渔民唤之为“无眼龙头”。

船の舳先は、船頭と言い、龍舟/龍船の場合には龍頭という言い方があるが、普通の船でも龍頭と言うことがある。舟山（杭州湾）地区では、長期にわたり、丸木舟形式の漁船の舳先（船頭、龍頭）の両側には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾がなく、漁民はそれを「無眼龍頭」と呼んでいた。この地区の漁民は、漢化しても、なお、船を龍と見なす祖先の文化を継承してきたのである。

舟山（杭州湾）地区の漁民が使う「無眼龍頭」。この単語が、「無目籠」が船眼の装飾のない船であることを私たちに教えてくれている。

『記紀』の物語が成立した頃の日本にも、船を龍と見なす人々、船眼の装飾がない船を「無目龍」と呼ぶ人々がいたのではないか。

では、「無目龍」は、なぜ、「無目籠」と表記されたのであろうか。

龍は、想像上の動物である。「無目龍」という表記をそのまま採用すると、人間が人間に作れるはずのない龍を作ることになり（作無目龍）、合理的ではないと考えられたのであろう。『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）には、さらに、竹を取って大目麁籠を作った、とあるので、籠は、龍と竹の二つの情報を伝える好個の文字と考えられたのではないか。

「無目籠之小船」は、意味のよくわからない「無目籠」に、よく知られている「小船」を後置して意味説明を補足する形式を取っている。

茂在氏は、上に引用した通り、カタマランは「カタマ小舟」と訳せる、と言う。全体像の捕

捉という点で問題はないが、正確ではない。この着想で訳すなら、カタマランは、「カタマ船（勝間船/堅間船/籠船）」となるからである。

先に、異文化の語彙（外来語）を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意訳の二つの方法があり、音訳では、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある、と述べた。そして、beerやcardは「啤酒」や「卡片」である、と例示した。泡があるとか、小さいとかいう要素を類名に持たせることはないので、いくら泡があったり、小さかったりしても、「啤酒」や「卡片」が、「啤泡酒」や「卡小片」となることはない。「之」を介していることからもわかるように、「無目籠之小船」の「小船」は、類名ではないのである。

シホツチの老翁は、第三者がその小ささに言及せねばならないほど、明らかに形状が小さい船をわざわざ作って山幸彦に提供したわけではない。この「小船」が、決して、小さい船という単純な意味で使われているのではないことは、もうおわかりであろう。「小船」は、ここでは、「コ（kau）と呼ばれる船」のことであり、すでに検討した通りである。

さて、「無目籠之小船」は、考察の便宜のために創作した仮の言葉である。以上のように、おおよその意味が取れたので、ここで、この一語に括る前の、個々の表記の出入りも検討しておきたい。

姉妹船の表記を見る限りでは、『古事記』には「之小船」が付され、『日本書紀』にはそれがない。しかしながら、実は、語部（集団）の言うカタマは補足説明なしにはもはや理解が難しかろう、という危惧は、『古事記』と『日本書紀』の記述に共通して見られる。『古事記』の編纂者は、「无間勝間/無間勝間」の直後に「之小船」を付すことで、『日本書紀』の編纂者は、文末の「一云」で「是今之竹籠也」と述べることで[414]、意味説明を補っている。両者は、表現の手法や用いた漢字こそ異なるが、伝えようとする情報には違いがない。どちらも、カタマが今の言葉で言うコ（kau）に相当する船であることを伝えている。

異文化の語彙（外来語）は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。『記紀』における「勝間」と「堅間」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった（あるいはできなかった）ために生じている。『記紀』がそうしなかった（あるいはできなかった）のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。先に、「小船」が何であるのかを見たが、「小」と「乎」の揺れ、さらには、「籠」の揺れも、同じ理由によるものである。

「無目」には、「无間/無間」と「無目」のバリエーションがあるが、いずれも動賓（ＶＯ）構造である。この構造は、この表現が、音声を表記したものではなく、意味を表記していることを示している。言い換えれば、「マナシ/まなし」という音声ではなく、「マ/まがない、マ/まを持たない」[415]という意味を表記しているのである。

残るは、「間」と「目」の出入りであるが、表記に違いはあるものの、伝達しようとする情

報には違いがない。「間」と「目」は、ともに「目/眼」のことである。

同一情報の記録に同一表記を用いる手法ほど単純明快なものはない。『古事記』の編纂者は、語部(集団)の言う二つの「マ」（音声情報）を二つの「間」（文字情報）で書き記したが（无間勝間/無間勝間）、後人は、二つの「間」が二つの「マ」を意味することを見て取ることもできず、例えば、前の「間」は「ま」を意味し後の「間」は「マ」を意味する、と誤解したりした（无間勝間/無間勝間）。

答は、既に出ているので、お気付きかも知れない。先に、船には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾を施さないものがある、と述べた。『古事記』は、「マタノタタラ」という音声情報（異文化の語彙、外来語）を「間」と書き記し、『日本書紀』は、「船の眼」という意味情報を「目」と書き記したのである[416]。

以上を踏まえて解釈すれば、「無目籠之小船」の意味は、次のようになろう。

「舳先に船眼（マタノタタラ）の装飾のないカタマランという船で、ある文化圏では無目龍と呼ばれ、船材に竹を使っているが[417]、今の日本語では、外来語のコと組み合わせて、通常、コぶねと呼んでいるものに相当する船」である。

「無目籠之小船」一語に、これほどの情報が織り込まれているのである。『記紀』の編纂者は、語部(集団)の提供する情報を淵博な知識で記録・編集したが、海の民の言語や文化に関する知識は、その後、急速に失われ、後世の人々は、同じ知識を共有しないため、書かれたことを理解することもできない。周辺諸語の知識なく、いわゆる日本語一視点のみの知識で、このような語彙に立ち向かうものではない[418]。

5．大目龜籠

『日本国語大辞典』（p.983）は、「大目龜籠」を次のように説明している。

おおま-あらこ【大目粗籠・大目龜籠】【名】目を荒く大きく編んだかご。おおまのあらこ。
＊書紀(720)神代下（水戸本訓）「因りて其の竹を取りて大目龜籠（オホマアラこ）を作りて、火火出見尊を籠(こ)の中に内(い)れまつり、海に投(い)る。」

「大目龜籠」は、次のようにも説明されている。

目のあらい籠[501]。

編目の粗い竹籠。これは「無目籠」（一五七ページ）の目のつまった籠とは反対に、目が粗いからすぐ沈んでしまう[502]。

系統を同じくする説話に、真っ向から対立する内容がある場合、いずれかに思い違い、あるいは、誤写誤記載が存在すると考えて間違いない。同じできごとの報告でありながら、姉妹船は沈まず、「大目龜籠」はたやすく沈む。両極端と言える程の矛盾をどう理解すべきかについて、合理的な解説や説明がなされていないが、それは手の出しようがないからではないのだろうか。

実は、「大目龜籠」は、表記に誤りがある。それは、記録の段階ではなく、編集の段階で生じたが、編纂者であれ研究者であれ、海の民の言語や文化に対する無理解のために伝写の誤りがあることに気付くことすらできなかった。

「大目龜籠」という表記は、姉妹船のそれとかなり異なっているが、特別な知識がなくとも、「大目」が「无目」を書き誤ったものであることは、容易に見て取れる。それを訂正すると、「龜」が浮いてしまうが、それは、「无目」を「大目」と誤認したことと連動する形で生じた誤記であり、やはり正されねばならない。では、『日本書紀』は、編集の段階で、どのような漢字を「龜」と書き誤ったのであろうか。古典/漢字を知る者なら、「龜」と見当をつけるのに、それほど時間はかかるまい。

語部（集団）が提供した音声情報は、記録の段階では、「无目龜籠」という文字情報に置換されたはずである。その後、編集の段階で、書かれたことの意味が取れず、「沈」（後述）とつじつまを合わせるため、「无目」を「大目」に、「龜」を「龜」に書き換えたわけである。

「无目龜籠」とその姉妹船が登場する説話は同じものであり、「无目龜籠」と姉妹船は同じ船である、と理解してよい。つまり、この「无目龜籠」と姉妹船の「無目籠之小船」とで、表記の上では「龜」（以下、特に必要な場合を除き、「亀」）の有無という違いはあるものの、実際には姉妹船も「亀」を船載していた、と理解してよい。記録・編集の過程で漏れがないとすれば、「無目籠」という情報を伝えた語部（集団）は、口承の過程で、「亀」という情報を落としたことになる。他の語部（集団）が伝えない、「亀」の船載という情報を保持した語部（集団）は、優秀であった。

もしも、「龜/龜」がなければ、「无目」が「大目」と誤記されることはなかったであろうが、そうすると、得られる情報は、姉妹船と同じ「无目籠」でしかない。「亀」は、そこから情報が取れない者には余計な存在であろうが、この一文字がもたらす情報は、計り知れないほど重要である。

「亀」は、亀でしかないが、海の民は、いわゆる亀を外洋船に乗せない。では、彼らは、どのような動物と共に航海したのだろうか。古代人の航海（法）について、ある程度の知識があれば、解答は決して難しくなかろう。

ここで、日本の古文献には、どのような例があるのかを見ておきたい。

「天鳥船」[503]、「天鴿船」[504]では、漢字の表意機能が利用されているため、字面の通り、「鳥」、「鴿」[505]と取ってよく、わかりやすい例である。

なお、「天鳥船/天鴿船」の「天」は、表面上、意味表記に見えるが、実は、例えば、天丼

の天(テン)や丸芳露[506]の丸(マル)と同じく、外来語の音声を表記したものであり、天(あま)（空）の意味はない。「天(アマ)」とは、「アウトリガー・フロート」（ama. n. Outrigger float; port hull of a double canoe, so called because it replaces the float.[507]）のことである[508]。

「天磐(ま)船[509]」では、鳥という情報を伝える文字は、字形に意味がなく音声に意味があるため、理解するには、「天(アマ)」同様、周辺諸語の知識がある程度必要である。岩(いわ)/磐(いわ)の船が水に浮かぶことはないことからも、意味表記ではないことがわかるが、「磐(イワ)」とは、「軍艦鳥」（'iwa. n. Frigate or man-of-war-bird [510]）のことである[511]。

「磐」は、適切な周辺諸語の知識がなければ、「磐(いわ)」と誤解するのは必至であるが、実は、『記紀』には、そのような誤解を避ける工夫がこらされている。「鳥(ぉ)之(ぉ)石(ぉ)楠船」、「鳥(ぉ)磐(ぉ)櫲樟船」[512]という表記は、「石/磐」を石や岩の「石(いわ)/磐(いわ)」ではなく鳥の「石(イワ)/磐(イワ)」に紛れなく理解してもらうために、言わずもがなの「鳥之(とりの)/鳥(とりの)」という情報を冗漫を承知で冠したものであるが、後人は、書かれたことの意味を取ることもできなかった。

最後は、「无目龜(ぉ)籠」である。

先に検討した通り、船名を構成する動物は、いずれも鳥であり、人々が鳥を船に乗せて航海したことを示唆している。そうすると、順当には、この「亀」は何かの鳥である、と解析するしかないが、古代人からそう呼ばれた鳥など実際に存在するのであろうか。

「石(イワ)/磐(イワ)」が受けた誤解も大きいが、「亀」が受けた誤解は、さらに大きい。亀は、一般に、爬虫類の亀を意味するが、さらに、鳥類の亀の意味がある。鳥類の亀は、全称を亀鴿といい、略称を亀という。古代日本語以外の言語では、例えば、古代英語でも、亀鴿は、通常、亀と略称されていた[513]。

ハワイ語に、kuhukukūという単語があり、鴿もしくは亀鴿を意味する（kuhukukū. Dove, turtledove[514]）。kuhukukūが、turtle（亀）と訳された例を挙げておく[515]。

The voice of the turtle, (archaic for turtledove), ka leo o ke kuhukukū.

海の民は、何のために、鳥を船に乗せて航海したのであろうか。

外洋航海で、目標の陸地や島が視界に入ってこない場合に、あらかじめ船に乗せておいた鳥（特に、ハトやカラスなどの陸鳥）を飛ばすのである。鳥が飛び去るなら、その方向に陸地や島があることがわかり、船に戻って来るようであれば、近くには陸地や島がないことがわかる。

今日の船舶には、航海用レーダーの搭載が欠かせないが、古代の海の民にとって、鳥はいわばレーダーであった。彼らにとって、外洋船に鳥を積み込むことは、特に目的地が大海の中の小さな島のような場合、乗員が生きて再び土を踏むことができるかどうかに関わる極めて重要な行為であった。その重要度の高さは、例えば、「天鳥船」を構成する三要素の中の一要素を「鳥」が占めることからも理解できよう。

『日本書紀』の「一云」に、「以細繩繫著火火出見尊而沈之」とある。「沈之」には、訓注がない。このことは、誤解されることはない、と考えられていたことを示しているように思われるが、如何であろうか。私たち陸上で暮らす者にも決してなじみのない概念ではないが、「沈」には、湿式の「沈」と、乾式の「沈」がある。人間は、湿式の「沈」をした場合、4-5分で死に至るので、この「沈」は、争う余地なく、乾式の「沈」でしかあり得ない。

海の文化では、乾式の「沈」は、人であれ物であれ、何かが水平線の下に消えることである。これに対し、陸(山)の文化では、人が触れることのできない物（例えば、星・月や太陽）には、乾式の「沈」を考え(られ)るが、人が触れることのできる物（例えば、船舶やその乗員）には、乾式の「沈」を考え(られ)ない。もうおわかりであろうが、「无目龜籠」とその乗員は、星・月や太陽と同じく、乾式の「沈」で沈んだのである。

水平線へと進みゆく船は、やがて、星・月や太陽と同じように水平線の下に消えていく。その様を日々見つめる海の民が、船の「沈」と、星・月や太陽の「沈」に何ら違いはないと考えたことは、極めて自然なことであったが、その発想は、日々の生活や物を見る視点の異なる陸(山)の民には想像すらできないものであった。陸(山)の民の文化が海の民の文化といかに違うものなのか、を具体的に示す例である。

古代の海の民にとっても、「板子一枚、下は地獄」であり、落水に対する備えは欠かせなかった。「亀」の舶載は、遠洋航海を示唆し、テザー（ハーネスライン）の使用もあったろうことを推測させるが、装着を本人任せにしない念の入れようは、火火出見尊の身分の高さを物語るものであろう。

「一云」に始まる文章は、わずか33文字ながら、提供する情報の質の高さは、秀逸である。

渡航用船舶として船眼装飾のないカタマランが準備されたこと、落水に備えた命綱は、火火出見尊には船上で動きやすいように他の乗員よりも細めのものが使用されたこと（細めではあるが、恐らく、強度を犠牲にしたものではなかろう）、火火出見尊の命綱は、本人ではなく十分な知識を持つ者がしっかりと装着し、その確認をしていること、出港後、水平線の下に消えるまで鄭重に見送られたこと、そして、この物語に登場するカタマランという船は、今風に言えば、竹でできたコ（kau）に相当すること、などが読み取れる。見たことを日にちをおかずに書き記した、という印象を持つ位に詳細な描写には、驚かざるをえない。

6．籠神社

籠という文字表記は、『日本書紀』同様、高度な漢字の知識を持つ者が記録の過程に介在していることを示している。『日本国語大辞典』（p.973）の説明は、前記の通りであるが、籠神社の名称は、コの神社、と、コノ神社、のどちらかに由来しているものと考えてよかろう。

これまでの解析から、前者であれば、コ（kau、船）の神社、の意であり、後者であれば、

コノ（kau-nui、船-大きい）神社、の意である、と見てよかろう。

人間は、目立つ事物を取り上げる傾向があるので、小さな事物は記録に残りにくい。この観点から見れば、コノ（kau-nui、大型船）神社、の方が可能性が高いであろうが、どちらかに絞り込む必要もなかろう。

先達の知見を手掛かりに、言語学的視点から、コノの意味を考察してきたが、当初の不明瞭さ/奇怪さが全くない、拍子抜けするほど単純な言葉であることがわかった。籠神社が、船の神社（コの神社）、大型船の神社（コノ神社）、という意味であることを理解することができたのである。コの神社、なのか、コノ神社、なのか、は重要ではなかろう。

なお、籠神社以外にも、地名に「コノ」の痕跡を留めるものがある。

例えば、巨濃郡（このぐん、鳥取県）、金浦（このうら、秋田県由利郡）がある。「kau-nui」との深いつながりで名付けられたものと考えてよかろう。細かく解析するなら、コのぐん、であれば、kau（船）の郡、コノぐん、であれば、kau-nui（大型船）郡であり、コのうら、であれば、kau（船）の浦、コノうら、であれば、kau-nui（大型船）浦、であることは、籠神社のケースと同じである。コノが一般的に使われていたことが伺えるが、このような事例は、今後さらに追究するならば、無数に発見しうるに相違ない。

7．おわりに

私たちは、古代日本語の問題を考えるのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、従前からの手法にはもはや頼れないケースがあることがはっきりした。タミル語やポリネシア語が解析上考慮すべき言語であることが否定しえないことがはっきりしたのである。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙（外来語）という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

101）岐阜県美濃市片知字上屋敷の籠神社の名称の由来も同様に考えてよかろう。

201）『古事記』（下巻、仁徳天皇）の原文表記は、加良奴（荻原浅男、鴻巣隼雄1973.p.289）、加良怒（山口佳紀、神野志隆光1997.p.304）。

202）茂在寅男1984. p.32。
「枯野」等の解釈に外来語（異文化の語彙）という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。

203）筆名。本名、政行。

204）KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html.
Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.

これは、管見に入った最も有用な知見である。引用の際の省略個所は、……、で示す。以下同じ。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoeと説明しているが、自身のHP（夢間草廬、http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/）では、kau = canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p.135)、「kaulua. nvi. Double canoe」（p.137）の例があるので、kauをcanoeと理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。

301）寺川真知夫1980. p.141-p.142。

302）小島憲之、木下正俊、東野治之1996. p.390の原文表記。
寺川真知夫1980. p.142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。

303）小島憲之、木下正俊、東野治之1996. p.437の原文表記。
なお、同頁には、「歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる」と頭注を付している。窮余の策ではあるが、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤ではないものの、研究方法として許容されない。後述するが、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいので、小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、逆に解釈をしてしまっている。趣は、主観的要素に左右される余地が大きく、基準として使えないことが改めてはっきりした。日本語一視点で解こうとする思考に傾きがちな研究者の意識改革が待たれる。

304）ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。例えば、菊乃/菊野、雪乃/雪野、幸乃/幸野、綾乃/綾野、等の人名は、心理の深層では過去の言語習慣（慣習）に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないか、と思わせる例である。乃/野を後置しない、菊、雪、幸、綾、等との意味の違いを人々が認識しているのか、認識できるのか、を考えるとよい。これらは、古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡で、今日まで受け継がれている例なのである。

305）小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p.369の原文表記。

306）小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p.121、122の原文表記。

307）小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p.162の原文表記。

308）小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p.464の原文表記。

309）「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注303）で、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤ではないものの、研究方法として許容されない、とは書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなかろう、と感じられることがあるのではないか。

310）地名では、例えば、広島県福山市金江町（かなえちょう）は、江に金(属)があることに由来するのではなく、江にkau-nui（船・大きい）があることに由来していよう。

311）地名には、その痕跡がある。例えば、田浦（たのうら、長崎県福江市）は、「tau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。

401）隙間のない籠。「籠」はコとも訓むが、古訓のカタマによる。これは一書第一（一六三ページ）の「無目堅間を以ちて浮木に為りて」について、「所謂堅間は、是今の竹籠なり」とみえ、カタマは竹籠の意である。……記に「无間勝間の小船」とあり、カツマの語形もある。（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p.156頭注８）
なお、この注に限ったことではないが、「竹籠」を「竹籠」と言い換えるのは、誤りである。両者は、別物であり、「竹籠」とは、「竹籠」のことである（注414参照）。これは、「竹籠」の意味が理解できないまま、「竹籠」以外にあり得ないとする思い込みが招いた結果である。「竹籠」という一筋縄ではいきそうにない対象を相手にする場合、ペンディング（将来の解決に待つ）、という選択肢を持つことも視野に入れておくべきであった。第３節『万葉集』の船で、研究者は「こぶね」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだという認識を頭の片隅に置く

とよい、と書いたが、古代日本語におけるコの存在が一日も早く認識されることを願うばかりである。

402）カタマは竹製の籠。カタマは「堅編籠」の意かという。カツマ・カタミとも。（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p.163頭注15）

403）マナシは「目無し」、カツマは竹籠で、カタマ・カタミともいう。固く編んですきまのない竹籠の意。神代紀には「無目籠」とある。西村真次は「无間勝間の小船」をベトナムの籃船と比較して、竹製の目を椰子油と牛の糞をこねた塗料でふさいだ船であるとし、また松本信広は竹製の目を漆で填隙した船と解している。（荻原浅男、鴻巣隼雄1973. p.138頭注３）

404）「無間勝間」は、編んだ竹と竹との間が堅く締まって、隙間がない籠をいう。それを船として用いたのであり、船の形に作ったのではない。これを、潮路に乗せるのであり、漕いで行くわけではない。『書紀』にはこれを海に沈めるとあり、『記』とは異なっている点、注意される。（山口佳紀、神野志隆光1997. p.126頭注４）
西宮一民1979. p.98には、原文や現代語訳はないが、以下のような注釈がある。
「間なし」は隙間がない。「勝間」は「堅簀（かたみ）」で固く編んだ竹籠。隼人は竹細工を得意とした。竹は呪力ある植物で、この容器に籠っている間に異郷で新生するという龍宮女房譚と同型の説話である。

405）『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）には、竹を取って大目麁籠を作った、とあり、さらに、是今之竹籠也、と付記する（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p.162-p.163）。

406）荻原浅男、鴻巣隼雄1973. p.138の現代語訳。

407）山口佳紀、神野志隆光1997. p.127の現代語訳。

408）三浦佑之2002. p.109の現代語訳。以下の脚注も見える。
原文には「无間勝間（まなしかつま）の小船」とあり、カツマ（カタマとも）は竹籠の意だが、ここは、目のない（マナシ＝目無し）竹籠であり、海中に潜ることのできる潜水艦のような船をイメージしているのだろう。海底にあるワタツミの宮に行くための船である。昔話「浦島太郎」のように亀の背に乗って海底の龍宮城へ行ったら溺れてしまうはずだ。

409）小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p.157とp.163の現代語訳。p.163には、「無目籠」を指して、「目のつまった籠」という注釈も見える。

410）茂在寅男1984. p.3-p.4。

411）④饰以龙形的。如：龙勺；龙旗。亦借指饰以龙形之物。（罗竹风主编1993. p.1459）

412）罗竹风主编1993. p.1459。

413）牧鱼人、http://www.ds.zj.cninfo.net/haiyangwenhua/muyuren/gongjuyanbian/003.htm.

414）『日本書紀』の注釈の意味は、もうおわかりであろう。「竹籠」とは、「竹の籠（kau）」である。注401）参照。

415）『古事記』は、「マなし」、『日本書紀』は、「まなし」である（後述）。

416）「目（ま）」は、音義融合とも取れる。現代中国語の例：引得（yǐndé）、インデックス。

417）無目籠之小船に竹がどの程度用いられたか、はわからない。台湾の竹筏（てっぱい）は、今日見ることができるものであり、竹製のカタマラン（原義）で、船眼がなく、外洋航海にも耐える。アティリオ・クカーリ、エンツォ・アンジェルッチ『船の歴史事典』p.13（原書房、1985）参照。

418）カタマランという言葉は、古代から使用範囲が広いが、小論では、茂在氏の説くところに従う。なお、茂在氏は、この単語が奈良朝前期までに日本に入って来ていた、と考えている（茂在寅男1984. p.44）。地名の痕跡も見ておきたい。志賀島（福岡市東区）は、博多湾の入口にある小さな島である。勝馬地区は、現在、田畑になっているが、かつては船が入れる入江であった。カタマランが高い頻度で利用したことに由来するのであろう。

501）坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋1967. p.169頭注10。

502）小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p.163頭注12。
503）『日本書紀』（神代下、第九段、一書第二）。
504）『日本書紀』（神代下、第九段、正文）。
505）鴿は、ハトの総称と理解してもよく、後述する「亀鴿」の略称と理解してもよい。
506）マルボーロ。「丸（マル）」は、音義融合とも言える。注416）参照。
507）Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p.22.
508）茂在寅男1984. p.2-p.3は、「アウトリガー」とする。一般には「アウトリガー」が使われるが、ここでは、「アウトリガー・フロート」を用いた方が紛れがない。
509）『日本書紀』（神武天皇）。
510）Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p.104.
511）初出は、茂在寅男1981. p.54-p.64。
512）それぞれ、『古事記』（上巻）、『日本書紀』（神代上、第五段、一書第二）。
513）"Turtle" was a common archaic English shortening of the name "turtledove."（Miguel Venegas, http://www.goldengateaudubon.org/birding/earlybirds/TheyCameBySea.htm）
514）Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p.174.
515）Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p.550.

参考文献

＜日文＞
荻原浅男、鴻巣隼雄1973。『古事記　上代歌謡（日本古典文学全集１）』小学館。
小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①（新編 日本古典文学全集２）』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。『萬葉集②（新編 日本古典文学全集７）』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。『萬葉集③（新編 日本古典文学全集８）』小学館。
小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『萬葉集④（新編 日本古典文学全集９）』小学館。
坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋1967。『日本書紀　上（日本古典文学大系）』岩波書店。
寺川真知夫1980。「『仁徳記』の枯野伝承の形成」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。
西宮一民1979。『古事記（新潮日本古典集成）』新潮社。
日本国語大辞典刊行会　第二版　編集委員会、小学館国語辞典編集部2001。『日本国語大辞典　第二版』小学館。
三浦佑之2002。『口語訳　古事記［完全版］』文藝春秋。
茂在寅男1981。『日本語大漂流　航海術が解明した古事記の謎』光文社。
茂在寅男1984。『歴史を運んだ船――神話・伝説の実証』東海大学出版会。
山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記（新編 日本古典文学全集１）』小学館。
＜その他＞
羅竹風主編1993。『漢語大詞典』（第十二巻）、漢語大詞典出版社。
Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

［付記］本稿は、平成21年度佛教大学特別研究費の助成による研究成果の一部である。

（こうとうじ　中国学科）

2009年10月13日受理